



聖なる夜を  
あなたと



eroken

クリスマスソングが流れる夜の繁華街を多くの人が行き交っていた。街はクリスマスのイルミネーションに彩られている。ケーキ屋の前でサンタクロースの衣装を着たおじさんがクリスマスケーキを売っていた。

交差点のそばに大きなデパートが建っていて、デパートの前は広場になっている。広場の通り沿いに大きなクリスマスツリーが立っていた。街灯の明かりとツリーに飾られた電飾の明かりがツリーの下を照らしている。

麻奈美はツリーの下ベンチに紙袋を抱えて思いつめた顔をして座っていた。これからしようとしていることが思ったとおりになるかどうか自信がなかった。思ったとおりになったとしても、結果が空振りに終わるかもしれない。でも、今日はクリスマスイブだ。今日をのがしたらきっと後悔する。そう思った。

うまくいかなかったらどうしよう。そんな不安をふり払おうとして、今までのことをふりかえってみる。一ヶ月前にみんなで会ったときのことだ。

学生時代に同じ店でアルバイトをしていた純一、麻奈美、良太、弘美の4人がファミレスで集まって雑談をしていた。

「もうクリスマスなんだなあ」良太が店内に飾ってあるクリスマスツリーを見てつぶやく。「クリスマスっていえば……」麻奈美がふいに話し出した。「好きな人とメリークリスマスだけでお互いに気持ちを伝えあうっていうのに憧れるなあ。それで、よけいなことは何も言わないの」

麻奈美は向かいに座っている純一を見ながら話していたが、純一の隣に座っている良太の方を見てつぶやいた。「相手がいればだけどね」

それに気づいた純一が良太をひじで軽くこづいた。良太が何も言わないので、純一は「俺はいつものように一人で飲み屋かな」とつぶやいた。

「ああ、ル・シェールね」弘美がすかさずつっこみを入れた。

「そういえば、みんなで飲みに行ったことがあったな」純一はそのときのことを思い出していた。

「純一に電話してもなかなかつながらないから、連絡がとれなくて困ったよ」良太が笑いながら言った。

「そうそう。もっとまめに充電するか、充電器を持ち歩くかしなさいよ」弘美もきつい調子で純一をせめた。

ファミレスでのできごとを思い出したあとで、麻奈美は座っているベンチの上で両手をこすって息をふきかけた。純一に電話してもなかなかつながらないのは本当に困る。そのときのことを思い出した。

夏のはじめに久しぶりに4人で会ってビアホールで飲もうということになった。現地集合の約束だったが約束の時間を過ぎても純一が来なかった。良太が携帯をとりだして純一に電話をかける。しばらくして「だめだ。つながらない」といった。

「またなの？」弘美が声を荒げる。「しょうがないなあ」  
10分おきに何度も電話したがつながらなかった。純一が今どこに住んでいるのか誰も知らなかった。立ち寄りそうなところもわからない。電話がつながらなければ来るのを待っているしかなかった。

約束の時間を一時間過ぎてから、やっと純一がやってきた。

「ごめん、遅くなった」そう言って、謝りながら三人の前に近づいてきた。

「じゅ・ん・い・ちい」弘美が怖い顔で純一の顔をにらみつける。そして、右手で握りこぶしを作ると、純一の頭を思い切り殴った。

「痛ってえなあ。ちょっとは加減してくれよ」純一が頭をさすりながら言った。

「遅刻した罰だな」良太が笑いながら言った。「何度も電話したんだ」

「ごめん。携帯のバッテリーが切れちゃっててさあ」そう言って頭をかきながら謝った。「今日は会社が休みだったから、のんびり昼寝してたんだよ。そしたら、目覚ましがわりの携帯のアラームがならなくて寝坊しちゃったよ」

「いいかげん、携帯を新しいのに変えるか……」弘美が、純一の左ほほを右手でつまんでひっぱりながらいう。「充電器を持ち歩くかしなさいよ」

純一は苦笑いでごまかすしかなかった。

弘美と純一のどつき漫才のようなやりとりを思い出して思わず麻奈美の口元に笑みがこぼれた。思ったこととをそのままを口にして、思ったようにふるまっている弘美がうらやましかった。

そうだ。あのあと、ル・シェールに連れて行ってもらったんだ。そんなことを思い出した。

ビアホールで、料理をおなかいっぱい食べて、ビールを山のように飲んだ。みんな上機嫌だった。純一が、遅刻したお詫びに二次会は自分がおごるからといって、みんなをル・シェールに誘ってくれた。

ル・シェールは、髪形がオールバックで、ちょび髭をはやした年配のマスターがひとりでやっている店だった。

「いらっしゃい」店に入るとマスターが一人一人に笑顔であいさつをしてきた。

「純ぼう、今日は珍しく団体だな」マスターが純一に声をかける。

「みんな学生のときのバイト仲間だよ。今でもたまにあってるんだ」純一が答えた。

「なんだ。女っ気がないやつだと思ってたけど、こんなにかわいい女の子の知り合いが二人もいたんだな」

マスターが、突きだしの準備をしながら、いたずらっぽく笑って話しかける。

「で、どっちが、純ぼうの彼女なの？」

「そんなんじゃないよ」純一が笑って否定する。

「そうなの？」マスターが突きだしを一人一人に出しながら、弘美と麻奈美に意地悪くたずねる。

「こんなやつ、頼まれても彼女になんかなりませんよ」弘美は真顔で答えると「そうだよね？」と麻奈美に同意を求めた。

麻奈美はそれには答えずに笑ってはぐらかした。

マスターが焼酎のボトルを棚からだして水割りを作ると水割りが入ったグラスをみんなの前にひとつづつ置いていく。

「純ぼうの彼女じゃないなら、おれの彼女になってみない？」マスターはいたずらっ子のような顔で笑いながら、麻奈美にそう聞いてみた。麻奈美はどう返事していいかわからなかった。

「マスターだめだよ。返事に困ってるじゃないか」純一がマスターをたしなめなる。

「そうか。そりゃそうだよな」マスターはひとしきり笑ったあとで「変なことを言って悪かったね」と謝った。

ル・シェールのマスターみたいなタイプは麻奈美は苦手だった。初めて会った女の子にあんなことを言うなんて信じられない。そんなことを思いながらあたりを見回すと、人がほとんどいなくなっていた。待ち合わせをしていた相手が来て、みんなどこかに行ってしまったようだ。

麻奈美は腕時計を見て時間をたしかめた。まだ早いかな。そう思いながら、一週間前のことを思い返していた。

「ごめんね。買い物につきあわせちゃって」麻奈美が申し訳なさそうにあやまる。デパートでのクリスマスプレゼントの買い物につきあってほしいといって純一を呼び出した。

なかなか電話がつながらないので、3日前から何度も電話してようやく連絡がとることができた。

「ま、ひましてたからかまわないけど」純一は寝癖だらけの頭をかいてから笑って答えた。「だけど、俺の意見なんかで参考になるのかな」

そんなことをいいながら二人はデパートの中をゆっくりと見て回った。

「これなんかどうかな」洋服店の中を見ているときに小さめのマフラーを手にして麻奈美がいった。

「良太と二人でつけることを考えるともっと長いやつがいいんじゃないか」同じマフラーを背の高い良太と小柄な麻奈美が二人でつける様子を思い浮かべて純一は言った。

そんな純一の様子を見ながら真奈美は少し黙り込んでしまった。

「どうした？」と聞かれて「ううん。なんでもない」と答えるのが精いっぱいだった。

「どうした？」突然話しかけられて麻奈美は我にかえった。目の前に純一が立っていた。

「良太と一緒にじゃなかったのか？」どこかで飲んでいたらしく、ほろ酔い気分のようだった。

「なんで、そんなこと聞くの」麻奈美は困ったような顔で純一に聞いた。

「たしかに良太は紳士的だし、変に気取ってないし、落ち着いてて、大人の男って感じがする。いい人だと思う」

一気にまくしたてて麻奈美は息をついだ。「でも、違うの。私が一緒にいたいのは良太じゃないよ」

いつもは大人しい麻奈美が感情的になったので純一は驚いた。それでも、麻奈美の顔から目をそらさずに黙って話を聞いていた。

「私がクリスマスと一緒に祝いたいのは……」麻奈美はそこまで言って、その後の言葉が出てこなかった。それでも、勇気をふり絞って言った。

「私、純一のことが……。純一と一緒に祝いたい」

言ってしまってから、麻奈美は、言っちゃった。もう後にひけない。そう思った。

しばらく間をおいて気持ちを落ち着かせてから麻奈美は言った。

「良太に比べたら、純一は、だらしがなくて、どうしようもないダメダメな人間だよ。いつも寝

坊してて、頭は寝癖だらけ。約束の時間を守らずに遅刻する。電話をかけてもなかなかつながら  
ない。お酒を飲み出したら、朝まで何件も飲み屋をはしごする。天然ぼけでとんでもない勘違い  
ばかりしてる……」

話がとぎれたところで純一が困った顔で言った。「自分がダメダメなのは自分でもよくわかって  
るよ」

「だから、それが勘違いなの」麻奈美がいった。「私はそんなダメダメな純一がいいの」  
「自分のことにはだらしないけど、他人には細かい気づかいできる。今みたいに私の話を黙って  
さいごまで聞いてくれる。そんな純一がいいの」

「けなされてるのか、ほめられてるのか。よくわからないな」純一は寝癖だらけの頭をかいて苦  
笑した。

麻奈美 of 告白を聞いて純一は、あらためて今までのことを思い返してみた。「なんか、今までいろいろ勘違いしてたみたいだけど、自分じゃわからないから聞いてもいいかな？」そう麻奈美に聞いた。麻奈美は黙ってうなずいた。

「ファミレスでみんなで話してるときに、いつも良太のことを気にして見てただろ」

「あれは、純一の顔をまともに見ることができなくて横を向いただけなの」麻奈美は困ったような顔でいった。

「純一の横にはいつも良太が座ってるでしょ。」

「買い物につきあってほしいっていわれた時は、プレゼントを渡す相手が他にいるんだと思ったよ」

「恥ずかしくて本当のことをいえなかったの」麻奈美はうつむいて答えた。「でも、本人にプレゼントを選んでもらったなら、間違いないかなと思って……」

麻奈美の返事を聞いてちょっと考えこんでいた純一が「麻奈美って、奥手なのか、積極的なのか、わかんなくなったよ」そう言って苦笑した。

「今日、会いたかったんなら電話してくれればよかったのに……」そう言ってから気がついた。だめだ。バッテリーが切れていた。

「電話がつながらなかつたら、ル・シェールに来てよかったのに……」そういってから、また、気がついた。「そうか。マスターが苦手なタイプだから一人じゃ入りづらいよな」

「それで、ここでずっと待ってたのか？」そういって、あらためて麻奈美を見た。コートを着ているが、頬が寒さで赤くなってる。指先が少しかじかんでいるようにも見えた。

「クリスマスはル・シェールで飲むって言ってたでしょ」麻奈美は照れくさそうに答えた。「そうじゃなかったとしても、ここにいればきっと会えると思って……」

純一はル・シェールで飲んだときはいつもこのデパートの前を歩いてアパートに帰っていた。前にみんなでル・シェールで飲んだときもこの前を歩いて帰った。

純一は麻奈美の脇の下に手を通して体を持ち上げるとベンチの上に立たせた。小柄な真奈美がベンチの上に立つと純一とほとんど同じ背の高さになった。

純一は黙って麻奈美の顔を見つめた。麻奈美も黙って純一の顔を見つめていた。

純一は下を向いてちょっと考え込んでいたが、すぐに頭をあげた。

「麻奈美」そうよびかけてから純一が笑顔で言った。「メリークリスマス」  
デパートの前の通りをヘッドライトをつけた車が通り過ぎていく。  
言葉の意味に気づいて麻奈美も笑顔で答えた。「メリークリスマス」

麻奈美は紙袋からクリスマスプレゼントのマフラーをとりだすと少し背伸びをして純一の首にか  
けた。純一はマフラーのあまった部分を麻奈美の首にかけると、何も言わずにやさしく抱きし  
めた。あたりに静かに雪が降りはじめた。

－ Fin －

聖なる夜をあなたと

<http://p.booklog.jp/book/68401>

著者 : eroken

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/eroken/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68401>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68401>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ